

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00116

研究課題名（和文）18-19世紀の東アジア古典籍ネットワークの形成と共時的思想空間に関する研究

研究課題名（英文）Research on the Formation of the East Asian Classical Books Network in the 18th and 19th Centuries and the Space of Synchronic Thought

研究代表者

桂島 宣弘（KATSURAJIMA, NOBUHIRO）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：10161093

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：コロナ禍の影響を受けたが、日韓国際研究会などを開催し、17世紀から植民地朝鮮期の儒林の動向についての基礎的調査を進め、儒林や郷校が刊行していた雑誌により基礎的データを蒐集した（『経学院雑誌』『大東斯文会報』『儒道』『日月時報』などの全記事目録、内容の種別や使用言語の分類、執筆者リストと来歴、全羅道儒道彰明会の『彰明』に登場する全人物リスト、朝鮮総督府公文書、『毎日申報』などの朝鮮全土の郷校に関わる記事のリストとその内容目録など）。成果の一部は、『東アジアの思想と文化』12号として刊行した。こうした儒林のネットワークを解明することで、17世紀～植民地期に至る日韓思想圏の構造に迫った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代世界のグローバル化の急速な進展もあって、近年ようやくにしてグローバルヒストリーの視点からする研究が登場している。だが、思想史研究分野では、こうしたグローバルヒストリーに基づく研究は未だ不十分な状況にある。本研究は、グローバルヒストリーの成果に学びつつ、単なる比較史や関係史を超えて、15-19世紀における東アジア思想圏の構造を明らかにし、その中での日韓思想の構造を示す点に学術的意義がある。とりわけ、韓国でも同様の視点からする研究が進みつつある点に鑑み、日韓の研究者の共同研究を推進し、それに基づいて東アジア思想圏の構造を明らかにしようとする試みは、日韓学術交流の進展に寄与するものとなるだろう。

研究成果の概要（英文）：Although affected by the Corona disaster, an international study group was held online to conduct basic research on the trends of Confucianism in colonial Korea, and the basic data of journals published mainly by Confucian scholars and Confucian schools were collected. By showing such a network of Confucianism, the structure of the Japan-Korea ideological sphere from the 17th century to the colonial period was approached.

研究分野：日本思想史・徳川思想史

キーワード：徳川思想史 朝鮮王朝思想史 経書の流通 植民地朝鮮 儒林と郷校

### 1. 研究開始当初の背景

令和1年度まで、研究代表者は科学研究費補助金も得て、18 - 20 世紀の東アジア思想空間における学術用語(日本漢語) = 翻訳語の生成と自他認識の変容、東アジアにおけるナショナルヒストリーの形成を解明する研究に従事してきた。それらの成果は、拙編『東アジア・遭遇する知と日本』(文理閣、令和1年)、「日本思想史学の『作法』とその臨界」(岩波講座『日本の思想』1、平成25年)、「『近世帝国』の解体と十九世紀前半期の思想動向」(『日本思想史講座』3、ペリカン社、平成24年)などとして公刊・公表してきた。幸いなことにこれらの論考は、韓国・中国でも注目され、拙著『从徳川到明治：自他認識思想史』(中国社会科学出版社[北京]、令和1年)、拙著『東アジア自他認識の思想史』(論衡[ソウル]、平成21年)、「Japanese Nationalism and East Asia」(“*Journal of Cultural Interaction in East Asia*” 5、平成26年)など、韓国語・中国語・英語にも翻訳され、この結果、日本のみならず高麗大学校・全州大学校・北京外国語大学・南開大学・台湾大学などの研究者と日常的に議論、意見交換を行うネットワークを構築することができた。だが、この研究過程において、18 - 20 世紀の東アジアの共時的思想史について、より具体的な古典籍ネットワークとして捉える重要性を痛感するようになった。ことに19 世紀以降の日本の儒学系知識人、アジア主義者の多くがこうした古典籍ネットワークと結びつき、同じくそのネットワーク下にあった朝鮮などの知識人と共鳴し合うことで、19 - 20 世紀初頭期のいわば近世最末期の思想圏を構成していたことは、現在までほとんど検討されてこなかったと言わなければならない。本研究は、こうした事情に鑑み、東アジア古典籍ネットワークの展開とその日本・朝鮮における思想動向との関わりについて実証的に解明し、最終的にはネットワークとしての東アジア思想史 という新しいジャンルを切り開くことが企図された。

### 2. 研究の目的

本研究は、韓国・全州大学校などとの研究とも連携し、日本も含めた東アジアの古典籍の共有とそのネットワーク、近代以降における日本漢語を基軸とした学術制度・学術編制と相互認識の関連を明らかにすることで、近代に至る日韓の共時的思想圏の構造を実証的に明らかにすることを目的としている。また、本研究が最終的にめざしていることは、この間、研究代表者が志向してきたトランスナショナル・ヒストリー(グローバルヒストリー)を、具体的歴史叙述として可能とすることである。既に韓国の歴史学界では種々の試みが進行中であるが、本研究は、この方法論を日本思想史学界に提示し、新たな叙述の方向性について問題提起することもめざした。

### 3. 研究の方法

本研究では、日韓での古典籍の収集・分布の調査とその文献学的研究が主たる研究方法となる。ただし、ネットワークや学術知の連鎖を検証する本研究では、学術制度・人脈・知識人の行動に関わる史料を収集することが不可欠であり、そのためには東アジアにおける現在の研究者間ネットワークを用いての情報交換・意見交換・研究会とシンポジウムの開催がより重要となってくる。研究計画としては、文献を中心とした史料収集、日韓中の研究者による研究会・シンポジウムの開催、情報発信としてのウェブページの構築と収集史料の公表、学術雑誌の刊行(『東アジアの思想と文化』11~12号)、成果の日韓での同時刊行(現在交渉中)が行われていくこととなる。

### 4. 研究成果

(1)令和2年度は、コロナ禍の影響を大きく受けて、計画されていた渡韓しての史料調査、意見交換、韓国・中国の研究者の招聘、国際研究会の開催などが、ほとんど実施できなかった。とはいえ、オンラインを活用して、4回の研究会を開催し、国際研究会も1回開催した。また、韓国・全州大学校でオンラインで開催された国際学術会議で報告し、同じくオンラインで開催された韓国日本学会で基調講演を行った。この結果、植民地期朝鮮での儒林の動向についての基礎的調査を進め、主として儒林や郷校が刊行していた雑誌の基礎的データを蒐集した。具体的には、朝鮮総督府の介入の下に組織された中央儒林団体である経学院の機関誌『経学院雑誌』、大東斯文会の『大東斯文会報』、儒道振興会の『儒道』、朝鮮儒教会の『日月時報』、朝鮮儒道連合会の『儒道』などの全記事の目録、内容の種別や使用言語の分類、執筆者のリストと来歴、全羅道の儒林団体である儒道彰明会の機関誌『彰明』に登場する全人物のリスト、朝鮮総督府などが作成した公文書、『毎日申報』、『経学院雑誌』などに記載されている朝鮮全土の郷校に関わる記事のリストとその内容目録などについて、基礎的データ蒐集を行うことができた。それらの成果の一部は、『東アジアの思想と文化』12号として刊行されている(令和2年3月)。また、全州大学校主催の国際学術会議では、近代日本の儒学が18世紀末以降の儒学の趨勢と深くつながっていることをのべ、朝鮮王朝~植民地期の儒林の動静と分岐していく背景などについて明らかにした。

(2)令和3年度は、引き続いてのコロナ禍のため ZOOM を用いたオンライン国際研究会を開催し、研究課題及びその周辺課題に関わる意見交換に努めた。主たるテーマは以下の通り。「帝国日本のマルクス主義と植民地朝鮮」「文化易地聘礼に対する徳川幕府の対応」「植民地朝鮮にお

る京城帝国大学『支那』系講座編成の特質」「明清の史書と山田方谷の『続資治通鑑 綱目講説』」「DBHP『植民地朝鮮の日本人宗教者』成果報告 『朝鮮総督府宗教関係文書』を中心に」「昭和戦前期の山崎闇齋研究と植民地朝鮮」「日韓中の国際共同教育プロジェクト『キャンパスアジア』の現況と課題」「琉球版『六諭衍義大意』の研究」「18世紀の日本儒学と地域社会」「『教団未滿』の宗教者と仏堂」「1910年代と20年代における朝鮮教会の自立と自治に関する一考察」「中国広東地方における慈善組織」「『傷寒論』の『日用』」。これらの研究会を通じて、17~20世紀における日中韓の学問・学術が依拠した古典籍の流通ネットワークについて意見交換を進めることができた。

(3)令和4年度はいずれも対面で、韓国から研究者を招聘しての国内研究会1回、韓国での国際研究会2回を開催することができた。研究担当者は韓国・東西大学校での国際研究会で、本研究のまとめとして『近世帝国』論と東アジアの儒教」と題する報告を行ったが、概略は以下の通り。徳川思想史をグローバルに開いていくためには、グローバルヒストリー、「近世帝国」論の視点から研究を行うことが重要である。すなわち、16世紀以降の東アジア儒教・朱子学思想圏では、理念的な「帝国」の求心性を共有しつつも、域内ではその求心力の普遍性を争う在地性が登場し、「華夷観の多元化」が進行していくが、それは「近世帝国」のイデオロギーとしての明代儒教、朝鮮儒教が構造的・同心円的に東アジアに伝搬していく過程として理解することができる。この時期、朝鮮王朝では「近世帝国」のイデオロギーが成熟してきたことに伴い李退溪らによって「理気」「四端七情」などをめぐる議論が活発化していたが、そこから遅れて成立した徳川王朝では、まずは朱子学入門書や大全本が朝鮮本として渡来し、藤原惺窩らに影響を与えることになるが、やがて50年ほどをへて朱子原典主義を掲げた山崎闇齋学派も登場し、李退溪などの影響も受けての「理気」「敬」などの形而上学的議論も行われていく。これらは「近世帝国」思想圏の「東辺」への朱子学の同心円的な浸透過程として捉えられる。また、徳川日本が「遅れて」明代儒教・朱子学を導入したということは、「早く」に明代儒教・朱子学を導入した朝鮮儒教との間に微妙な相違点を刻印することになる。すなわち、徳川儒教が接した明代儒教とは、性理学的儒教から復古と考証へと転回しつつあった明代後期の儒教・朱子学であった(それが性理学的な性格の朝鮮儒教とは異なる古学派の登場を準備する)。このような思想構造・古典籍ネットワークを理解することで、東アジア思想圏内の徳川思想の新たな位相が浮かび上がってくることになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 桂島宣弘	4. 巻 87
2. 論文標題 天皇制の過去と現在	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本文化学報	6. 最初と最後の頁 42 - 53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21481/jbunka.87.202011.041.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桂島宣弘	4. 巻 300
2. 論文標題 コロナ禍における「批判的知性」の復権のために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 新しい歴史学のために	6. 最初と最後の頁 16-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桂島宣弘	4. 巻 127
2. 論文標題 1965年日韓国交正常化と日韓関係における相互認識	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本学報	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15532/kaja.2021.05.127.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 5件／うち国際学会 6件）

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 コロナ感染症（COVID-19）と現代日本
3. 学会等名 韓国東亜大学校特別講演会（オンライン）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 安丸良夫の方法論
3. 学会等名 日本思想史研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 徳川時代後期の儒教と日本の近代
3. 学会等名 全州大学校古典学研究所国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 1965年日韓国交正常化と日韓関係における相互認識
3. 学会等名 韓国日本学会（第101回大会）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 民衆宗教研究を振り返って
3. 学会等名 「宗教と社会」学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 「近世帝国」論と東アジアの儒教 - - 徳川儒教と朝鮮
3. 学会等名 第35回退溪学国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 19世紀日本の民衆宗教の「病氣直し」
3. 学会等名 第4回国際学術大会（朝鮮大）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 「近世帝国」論と東アジアの儒教
3. 学会等名 韓日共同セミナー（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

桂島宣弘のWEB Site <a href="http://www.ritsumei.ac.jp/~katsura/index_jp.html">http://www.ritsumei.ac.jp/~katsura/index_jp.html</a> 全州大学校古典学研究所（韓国語） <a href="https://www.jj.ac.kr/icsk/index.jsp">https://www.jj.ac.kr/icsk/index.jsp</a>
---

## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 東アジア思想文化研究会企画研究会	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 韓日共同セミナー	開催年 2023年～2023年

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
韓国	延世大学校近代韓国学研究所			
韓国	全州大学校古典学研究所			
韓国	高麗大グローバル日本研究院			
韓国	東西大日本研究センター			
中国	広東外語外貿大学キャンパスア ジア専攻			